

9  
154

検定申請本

K1201  
69  
3

K120.1

69

3

日本弘道會會長 西村茂樹校定  
尋常科  
文學 士天野爲之謹輯  
兒童用

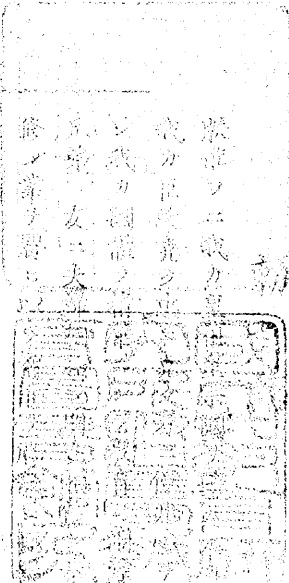
訂正小學修身經 卷三

東京 富山房藏版

日本弘道會會長 西村茂樹校定 尋常科  
文學 士天野為之謹輯 兒童用

# 訂正小學修身經 卷三

東京 富山房藏版



此書は、修身の根本を教へ、  
徳行の道を示す。其の要は、  
孝、悌、忠、信、廉、恥、節、儉、  
、誠、敬、の十徳に在り。此の  
十徳を修め、則ち君子の道に  
至るべし。此の書は、小學校  
の修身科に用ゐる。其の體裁  
は、淺く、易く、且つ、實に  
益あり。凡そ、小學校の児童  
は、此の書を讀み、其の徳を  
修め、君子の道に邁進すべし。  
此の書は、修身の根本を教へ、  
徳行の道を示す。其の要は、  
孝、悌、忠、信、廉、恥、節、儉、  
、誠、敬、の十徳に在り。此の  
十徳を修め、則ち君子の道に  
至るべし。此の書は、小學校  
の修身科に用ゐる。其の體裁  
は、淺く、易く、且つ、實に  
益あり。凡そ、小學校の児童  
は、此の書を讀み、其の徳を  
修め、君子の道に邁進すべし。

御茶屋 御堂

明治二十三年十月三十日

目次

第一課	紀元節	第十課	友を擇ぶべきこと
第二課	天長節	第十一課	稻穂の戒
第三課	祖先を祭る	第十二課	正直
第四課	鳥の反哺	第十三課	森蘭丸のこと
第五課	ふさ女父の業を助く	第十四課	人の見ぬ處にても物物は叮嚀にすべし
第六課	行儀	第十五課	改過
第七課	つゞき	第十六課	小野篁過を改む
第八課	平次郎よく姉に事ふ	第十七課	先生を敬ふべし
第九課	こふづると雀と	第十八課	修學
		第十九課	

訂正 小學修身經卷三 尋常科 兒童用

西村茂樹校定  
天野爲之謹輯

第一課 尊皇

およそ、この國に生れたるもの、たれか  
天皇陛下のおんめぐみをうけざる。わ  
れらは、そのおんめぐみによりて、やす  
らかに、この日をおくるのみならず、わ

これらの先祖も、また、世々の天皇につかへて、かぎりなきおんいつくしみを、かうぶりたるものなり。されば、この國の人としては、しばらくも、忠義の心なかるべからず。

第二課 楠木正行卿

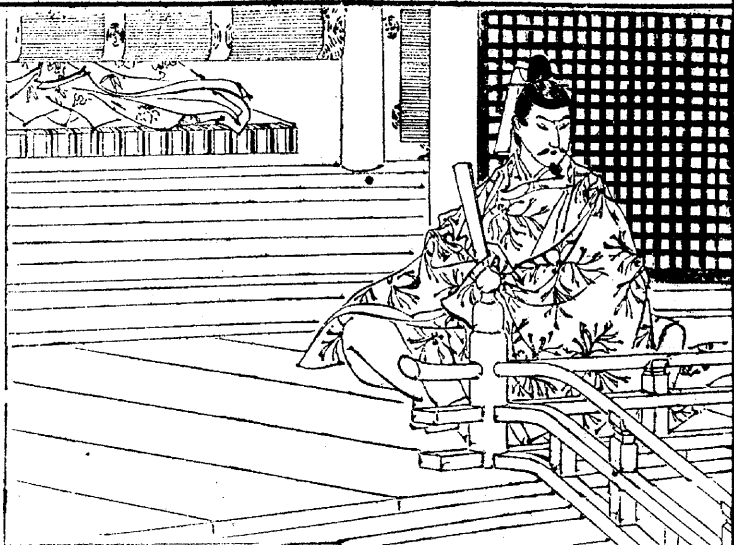
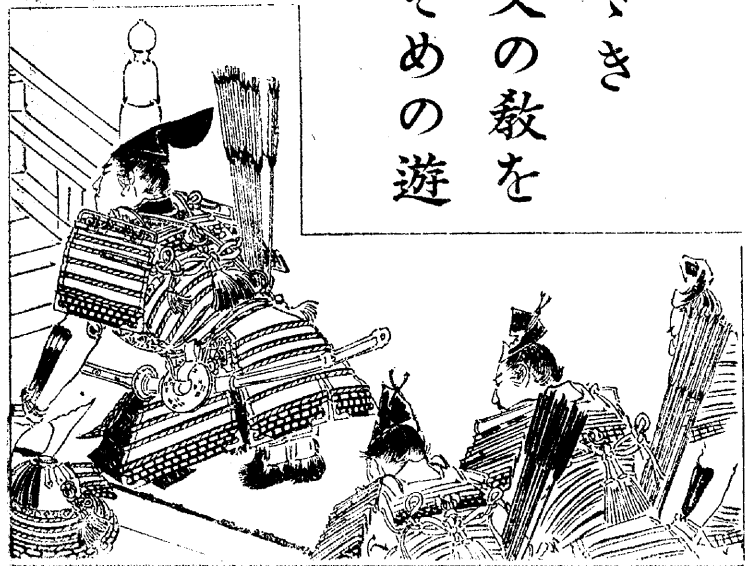
むかし、後醍醐天皇の御世、足利尊氏むほんをおこし、大軍をひきゐて、みやこ

へ、せめのぼりしとき、楠木正成これをふせがんとて、子正行をよびて、「われこのたびのたゝかひに、うちじにせば、尊氏のいきほひ、ますますさかんならん。汝、父の志をつぎて、尊氏をうちほろぼし、天皇の御心を、安んじ奉るべし」と、教へしかば、正行なくく、父と別れたり。これ、正行が、十一歳の時な

りき。

第三課 つゞき

かくて、正行は、父の教を  
まもりて、かりそめの遊  
にも、いくさの  
まねをなし、し  
ばらくも、忠義  
の心をうしなは



ず、その後、度々  
の戦に、常に、尊  
氏のいくさを、  
やぶりたり。

一とせ、尊氏のけらい高師直トシノチロといふもの、あまたの兵をひきゐて攻めのぼりしが、正行は、此度はうちじにとかくごして、天皇に、おんいとまを申し、つひに河内國四條畷カハチノクニシツにいたりて、力のかぎり戦ひてうちじにせり。正行の如きは、忠孝の二つを全くせる人といふべし。忠臣は、孝子の門にいづ。

第四課 孝行

父母のおんは、山よりも高く、海よりも深し。一生のあひだ、いかに孝行をつくすとも、たゞその萬一に、むくゆるにすぎず。されば、人の子としては、父母の生ける時、力の及ぶかぎり孝行すべし。わかき時、孝行を怠たり、父母みまかりて後、くゆるも、そのかひなかるべし。

### 第五課 長吉の孝行

長吉は貧しき人の子なり。八つの年、父母ともに病にかゝりて、その日のくらしも、たてかねしに、長吉は幼き身にて、毎日、山に入りて木をきり、わらびをとり、または、人のために、ものをせおひなどして、わづかの錢をえ、それにて父母をやしなひたり。かくすること、



久しかりしかば、その孝行、世にかくれなく、いつか、おかみにも、きこえて、ものをたまはりたりと



いふ。

烏に、はんぼの孝あり。

第六課 兄弟仲よくすべし

兄弟は、おなじ父母の子にして、われとひとしく、父母のいつくしみたまふものなり。されば、常に仲よくして父母の心を、なぐさむべし。

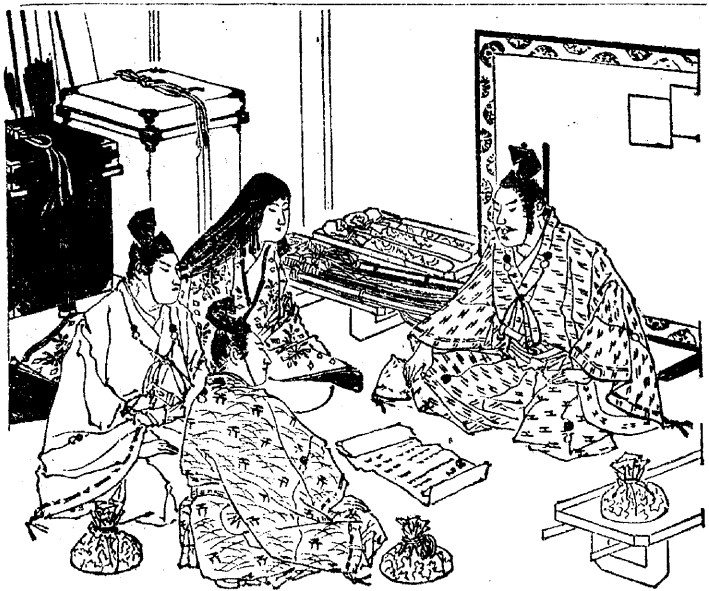
兄弟は、年うへなれば、之をうやまふべし。弟妹は年したなれば、これをあはれむべし。兄弟仲よきは孝行の一つなり。

第七課 北條泰時の友愛

北條泰時は、兄弟をいつくしむ心、深かりし人にて、父よりゆづられたる土地は、大てい弟どもに分けあたへて、わが身は、少しばかりをとりたり。

ある日、泰時は弟朝時トモトキ、なんぎにあひた

りと聞きて、  
たゞちに行  
きて、すくひ  
しに、何事も  
無かりしか  
ば、ある人い  
さめて、天下  
のまつりご



とを、なしたまふ身は、いますこし、お  
ちつきて、ものをなしたまへ」といひし  
に、泰時いふよ、「弟のなんぎにかゝる  
といふ事は、他人にては小事ならんが、  
わが身にとりては、これほどの大事な  
し」とこたたりといふ。

兄弟は、左右の手の如し。

第八課 朋友の交り

朋友に交るには、信義を本とし、たがひに、善をすゝめ、惡をいましむべし。これ朋友の道なり。朋友のあやまちを知りて、いさめざるは、まことの朋友にあらず。難あれば、あひたすけ、患あれば、あひすくふも、また朋友のつとめなり。

第九課 伊藤一元

伊藤一元は、朋友に、しんせつなりし人なり。その友南宮大湫、江戸にうつりすまんとせしとき、妻子を一元にあづけ、來年になれば、むかへとらん」とて、出で行きたり。

大湫、江戸に出でし後、火事にあひて家財なども、残るかたなく、失ひしかば、妻子をむかふる事も、かなはずなりぬ。一元、之を聞きて、その不幸をあはれみ、わ

が品物を賣りはらひて、路用をこしらへ、大湫の妻子を江戸に送りたり。大湫、深く一元の信義をかんじ、この後、金



を返さんとせしに、一元これをうけず、**「艱難相救ふは、明の道なり」**と、いひたりとぞ。

第十課 ひかへめにする事

出るくひは、うたる。

といふことばあり。あまりに、出すぎたるくひは、かへりて人にうちひくめらるといふことなり。すべて人を先にし、

われを後にすれば、人に、にくまるゝことなし。

第十一課 ことばを謹むべし

ことばは、おもふことを、かよはするものにて、これほど、重寶チヨウホウなるものなし。されども、一言のまちがひより、大なる禍を、おこす事もあれば、また、ことばほど、謹むべきものなし。すべて、こと

ばは、おだやかにして、少きをよしとす。ことに、人をそしるは、害ありて益なきことなり。

舌は禍の根。

第十二課 八郎兵衛のはなし

人と交りて、仲あしきは、わが心の、至らぬ故なりと思ふべし。われより、しんせつにすれば、人もまた、しんせつにす



るものなり。

八郎兵衛といひしもの、となりすめる庄兵衛と仲わるく、九年の間ものもいひあはざりしが、ある

日思ふよ、「庄兵衛との仲わるきは、みな、わが心の至らぬゆゑなるべし」と。それより、あさゆふ、ゆきあふごとに、ていねいに、あいさつせしかば、庄兵衛も、いつか、心とけて、後には、むつまじき友となりたり。

第十三課 用心

長きつゝ、みも、ありの穴より、くづれは

じむることあり。おほかた、禍は、小さ  
あやまちより、おこるものなれば、わづ  
かのことにても、用心を怠るべからず。  
また、すべての事、まへかたより、心を  
用ひ、つゝしむときは、あやまちすくな  
し。まへかたよりの思案なきときは、事  
にさしあたりて、あわてつまづくこと  
多し。

### ゆだん 大敵。

第十四課 わが身を省みよ

人の過は、よく見ゆれども、わが過は、  
かへりて、知れがたきものなり。され  
ば、よく、人のいさめをいれ、常に身を  
かへりみて、その行をつゝしむべし。  
わが身の、すぎたる行をかへりみれば、  
くゆること多し。いたづらに、すぎた

る事をくいずして、たゞ、この後は、く  
いなからんよーに、つとむべし。

第十五課 みめより心

人は、かほかたちの、みにくきを恥ぢず  
して、心のみにくきを恥づべし。かほか  
たち、いかにみにくくとも、心だに美し  
くば、よき人といふべし。女はことに、  
きもの、かみかざりなどにのみ、心をと  
めて、身の行を、かへりみぬもの多し。  
つゝしむべきことなり。

第十六課 オキ 瀧鶴臺の妻

瀧鶴臺の妻は、よき心がけの人にて、常  
に、その行を正しくせんと、おもひ、赤  
と白との絲をまるめて、たもとに入れ  
おきたり。

さて、善き心のおこりし時は、白き絲を





ふやし、悪しき  
心のおこりし  
時は、赤き絲を  
ふやし、時々、  
二つのたまの  
大きさをくらべ  
て、ますます、  
その行をつゝ

しみたりといふ。

第十七課 彦一米を返す

彦一は、をさなき時、父を失ひし人なる  
が、あるとき、父のかりたる米、いまだ、  
返さずによりし事を知り、たゞちにか  
しぬしをたうねて、「これは、なき父の、  
かりし米なれば、返し申すべし」とい  
ふに、かしぬしは、「そのおぼえなし」と



て、うけとら  
ず。とかく、い  
ひあらそひて、  
はてしなかり  
しかば、この  
こと、上に聞え  
て、二人の心  
の、いさぎよき

を、ほめられたりといふ。

第十八課 光陰を惜むべし

(一)

今日學ばずして、明日ありと、いふこと  
なかれ。今年學ばずして、明年ありとい  
ふ事なかれ。光陰は矢の如く、歲月は人  
を待たず。

(二) 金剛石 (皇后陛下御歌)

こんごーせきも、みがかずば、  
たまのひかりは、そはざらん。  
ひともまなびて、のちにこそ、  
まことのとくは、あらはるれ。  
とけいのはりの、たえまなく、  
めぐるがごとく、ときのまの、  
ひかげをしみて、はげみなば、  
いかなるわざか、ならざらん。

第十九課 紫式部

何事を習ふにも、をさなきときより、勉  
強せざれば、生れつき、いかにかしこく  
とも、名だかき人とは、なりがたから  
ん。

紫式部は、いとけなきころより、學問を  
このみ、兄のかたはらにありて、讀書を  
聞き、その後、あまたの書物を読み、



怠らず勉強せ  
しかば、つひ  
に、すぐれたる  
學者となり、そ  
のあらはした  
る書物は、源氏  
物語とて、今の  
世までも傳は

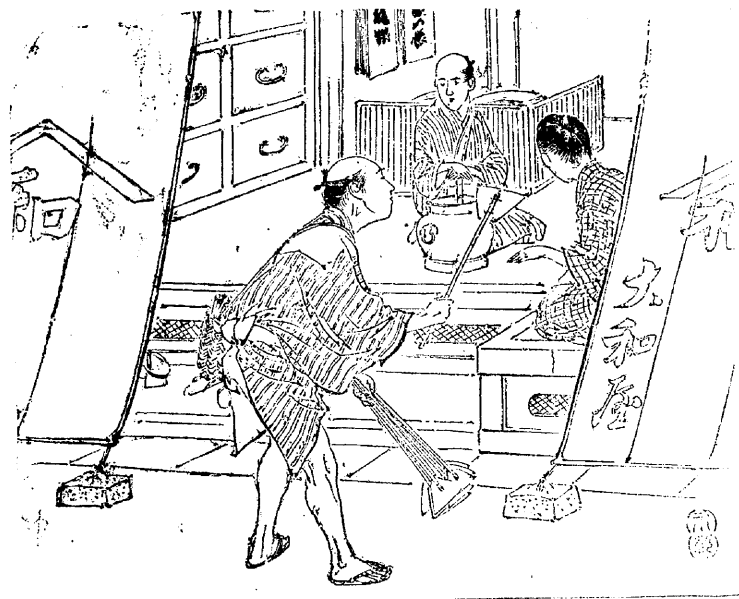
りて、その名、世に高し。

をりくに、遊ぶいとまはある人の、  
いとまなしとて、ふみ讀まぬかな。

第二十課

川村瑞軒の勤勉

若きとき、苦勞すれば、老いてのち、樂  
おほし。川村瑞軒は、若きころ、甚だ貧  
しくして、ある時は、ちりたの中よ  
り、古雪駄フルセツダを拾ひ、はへたゝきといふも



のをこしらへて、これを賣り、僅にうゑをしのぎし事あり。又或時には、人のはきすてたる、ぞり、わらぢなど

をあつめて、水にひたし、つたといふものをつくりて、かべぬりに賣り、わづかの錢をえしことあり。かく、さまざまにほねをりて、業をはげみしゆゑ、つひには、一代のうち、大なるかねもちとなれり。

### 苦は樂の種。

#### 第二十一課

#### 酒井忠勝サカキタカカツの儉約

人は、貴きと、賤しきとを問はず、けんやくをむねとすべし。酒井忠勝といふだいまよーは、きはめて、けんやくの人なりき。



或時一人のけらい、じよーばこを、こよりのまんなかにてむすび、りよーはしをきりすてしを、忠勝よびとぐめて、汝はしんしよーを、もちくづすものなり。かたはしにて、むすびなば、一本にて、二度のやくにたつべきものを」と、をしへたりとぞ。

第二十二課 争ふは益なし

人と争ふは、益なきことなり。人もし、われに、無禮を加ふることありとも、いかり争ふべからず。その人、悪しき事と知りて、爲せるものならば、これと争ふとも、たゞ、わが身を、そんするのみならず。また、知らずして、無禮を加へたるものならば、なほさら、いかるべきわけなし。

わが爲せる過は、よくこれをわびて、その罪を謝すべし。他人の爲せる過は、大目に見すぐして、あながちに、その罪をせめとふべからず。

堪忍は、無事長久の基。

第二十三課 八介主恩に報ゆ

石垣甚兵衛といひし人のしもべに、八

介といふもの  
 ありき。八介が  
 十五歳のころ、  
 石垣の家おと  
 ろへて、あまた  
 の召使、いとま  
 をこひて、立ち  
 さりしに、八介



のみは、のこりてつかへたり。

かくて、八介は、いかにもして、主人の  
 身代をたてなほさんと思ひしかば、ま  
 うけたるものは、みな主人の用につか  
 ひ、わが身のためには、一錢もたくはへ  
 ざりき。

かゝれば、八介の行を聞きて、かんぜぬ  
 ものなかりしが、中にも、或役人は、八



介をよびて、そなたの行は、わが子にも、見習はせたければ、わが家に来たるべし」とて、八介をともなひゆき、さまざまのちそゝをなし、かねなど、あまたあたへたりといふ。

百行のうち、恩に報ゆるを大なりとす。

第二十四課

おもひやりの心

人には、おもひやりの心なかるべからず。わが身に、好ましと思ふことは、人もよろこび、わが身にうれしからぬことは、人もよろこばぬものなれば、わが身をもととして、人の身をおしはかるべし。さすれば、おほかた、道にはづるることなし。むかしの人の言に、己の欲せざる所、人に施すことなかれ。といひしは、このことなり。

第二十五課

つゞき

とりむしなど、よわきものを苦めて、たのしみとするは、おもひやりの心なき人なり。もし、われより幾十倍も力ある人、わが手足をしばり、われをうちたゞきなどせば、その苦は、いかばかりぞ。これを思はゞ、決して、よわきものを苦むべからず。

第二十六課

星野彌兵衛

或年、きょんにて、うゑにせまりし人々、金もちの家におしいりなど、せしことあり。そのころ、彌兵衛とて、年十三の小供ありしが、父とともに、人々をさとして、わがあるかぎりの米をば、のこらず施しあたへたりといふ。  
なほ、その後にも、親子にて、人をたす



けしこと、た  
びくあり。  
そのあたり  
の人々、彌兵  
衛の名を知  
らぬものな  
かりきとい  
ふ。

第二十七課 公益を圖るべし

この世は、人々たがひに助け合ひて、た  
ちゆくものなり。されば人は、それぐ  
の仕事をつとめて、わが身をたて、わが  
家をおこすのみならず、多くの人の、  
ためになるよーに、心がくべきなり。

第二十八課 名取彦兵衛の事

蠶をかひて、絲をとる事は、ふるくより

行はれしが、  
よき絲取器械  
なかりしゆ  
ゑ、絲のたち  
よろしからず  
して、外國へ  
は、賣るゝこ  
と少かりき。



甲斐國カニに、名取彦兵衛ヒノといひし人あり。  
これをなげきて、よき器械を造らんと  
て、ながき年月の間ほねをりて、工夫し  
たれども、よき器械できずして、彦兵衛  
の家は、しだいに、貧しくなれり。

第二十九課 つゞき

されども、彦兵衛は、すこしも志をかへ  
ず、よき器械を造りて、國益をまさんと

のみ、一すぢに思ひこみて、つひに、一の器械をつくりいだせり。

その器械にて取りたる絲、ひよーばんよく、外國へも、賣れゆく事となりて、大に國益をましたり。彦兵衛の如きは、國のために、一身をかへりみざりし人といふべし。

第三十課 心をつよくもつべし

心つよき人は、事にあたりてひるまず、いかなるさまたげありとも、中途にて、その志をくじくことなし。勤勉も忍耐も、みな、つよき心より、出づるものなり。およそ、この世にある間は、あまたの難儀にあふものと、覺悟して、心をつよくもつべし。

第三十一課 義勇

人には、勇氣なかるべからず。勇氣なく  
ては、何事も、なしえぬものなり。され  
ども、勇氣を出すべきところと、出すべ  
からざるところとを、わきまふべし。い  
ちづに、思ひたちて、理も非もかまは  
ぬは、まことの勇にはあらず。よく前後  
を考へ、理非をわきまへてのち、義のた  
めにすゝむを、まことの勇氣とす。これ

即ち義勇なり。

第三十二課 谷村計介の事

明治十年のいくさに、賊軍熊本城をか  
こむこと、きびしかりしに、谷少將、城  
内のありさまを、總督の本營に知らせ  
んとて、その使を、谷村計介といふ伍長  
にいひつけたり。  
計介、見苦しき着物をきて、夜にまぎれ

て、城を出でしが、まもなく、賊にとらへられて、いろく、せめ問はれしに、たゞ、知らずとのみ答へしかば、賊はあらな



はもて、しばりおきたり。

計介、夜中になりて、番兵の、ねしうま  
りしをうかゞひ、なはをきりて、のがれ  
出で、ひるまは、山にかくれ、よるのみ、  
あるきしが、不幸にも、再び、賊にとら  
へられたり。

第三十三課 つゞき

計介、このたびは、わざとなきかなしみ

しを、賊のものども、いやしきものならんと思ひ、人足としてつかひたり。計介またそのひまをうかがひ、こゝをものがれいで、つひに、總督の本營にいたりて、城内のありさまを知らせたり。

その後、田原坂ハラノザカのいくさに、計介は、はなぐしく戦ひて、うちじにせしかば、あたら武士を殺したりとて、惜まぬものなかりき。

いくさをはりてのち、人々、碑を靖國神ヤスクニジン社の境内にたて、その魂をなぐさめたり。計介の如きは、まことに軍人のかゞみといふべし。

第三十四課 兵役租税のつとめ

兵士は、わが國のまもりにして、兵士となるは、わが國民の、ほまれある務な



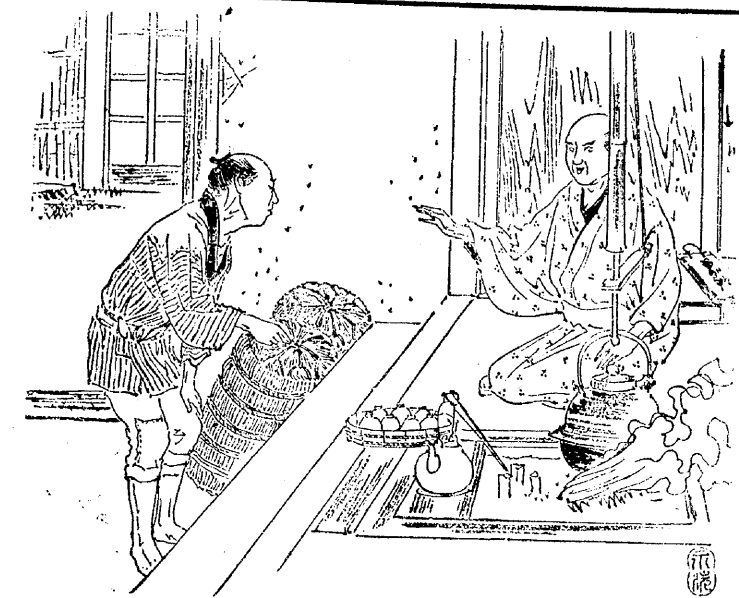
り。されば、男子と生れたるものは、みな、兵隊に加はりて、この務をつくすべし。國民と生れて、兵隊に加はること能はざるは、大なる恥といふべし。

われらは、また、租税を納むべき務あり。この務を怠るは、國民の恥なれば、おのく、家業をはげみで、人におくれぬよ、租税を納むべし。

第三十五課 與三兵衛のはなし

與三兵衛といひし人、家甚だ貧しかりしに、年々のねんぐは、富める人より、さきに納めたり。

或人、與三兵衛にむかひて、「おん身、ゆたかならぬ身にて、納めものにおくれぬは、感心なり」といひしに、與三兵衛答へて、「ねんぐは、かみへの御奉公な



れば、まうしき  
ものなりとて、  
怠るべきにあ  
らず。それゆ  
ゑ、秋のとりい  
れるとき、第一  
に、ねんぐのぶ  
んをとりのけ

おき、少しも、外の事には、つかはぬな  
り」と、いひたりとぞ。まことによき心  
がけの人といふべし。

第三十六課 愛國

わが大日本は、氣候よく、土地肥えて、  
景色のうるはしきことも、世界第一な  
り。およそ、世界に國々あれども、わが  
國ほど、たふとき國なし。われらの、こ

の國に生れて、天皇陛下の、おんいつくしみを受くるは、まことに、かぎりなき幸福といふべし。されば、人々、つねに、この幸福を思ひて、ますます、國の榮をこゝろがけ、國の光を、かゝやかさんことをつとむべし。

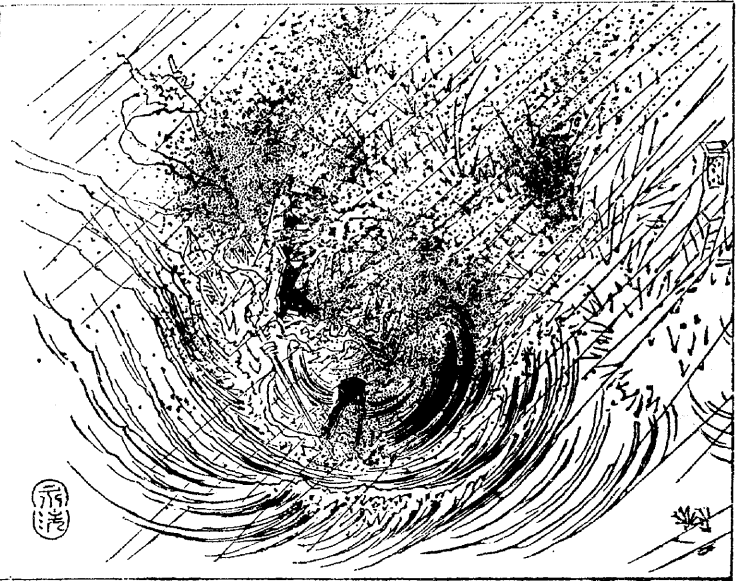
第三十七課 元寇の役

昔、後宇多<sup>ユタ</sup>天皇の弘安<sup>コアン</sup>四年、元國<sup>ゲンコク</sup>の兵十萬ばかり、數千の軍艦をうかべて、わが國に、おしよせしに、日頃、忠義の心にあつき、わが國民のことなれば、一身をうちすて、國のために、つくさんは、この時なりとて、きそひたちて、ふせぎ戦ひたり。

をりしも、大風ふきおこりて、敵の軍艦、みなやぶれしかば、さしもの大軍、

さんぐくに、う  
ちなされ、生き  
てかへりしも  
の、わうかに、  
三人なりき。

あはれ、今  
日の、わが  
國人も、國



のあゆふきに  
のぞみては、進  
んで、力をつく  
さんこと、ゆめ  
く、弘安の將  
士に、おとるこ  
となかれ。

正訂小學修身經卷三 兒童用

明明明明明  
治治治治治  
三三二二二  
十十十十十  
四四九九六  
年年年年年  
十一一十一  
月月月月月  
廿廿二七十四  
日日日日日  
訂訂訂訂發  
正正正正  
版版版版  
發行發行  
行行行行

訂 正  
小 學  
身 修  
經 身  
生 尋  
徒 常  
用 科

入門	定價金	三錢六厘
卷壹	定價金	九錢
卷貳	定價金	六錢
卷參	定價金	拾錢
卷肆	定價金	拾錢

編輯者 天野為之

發行者 東京市神田區裏神保町九番地  
合資會社 富山房

代表者 合資會社富山房社長  
坂本嘉治馬

印刷者 東京市麹町區有樂町三丁目壹番地  
大西鍊三郎

印刷所 東京市京橋區弓町二十四番地  
三協合資會社

發兌元 富山房

電話本局一〇三六番  
電信掛號ヤマフ



1/154

120.1

